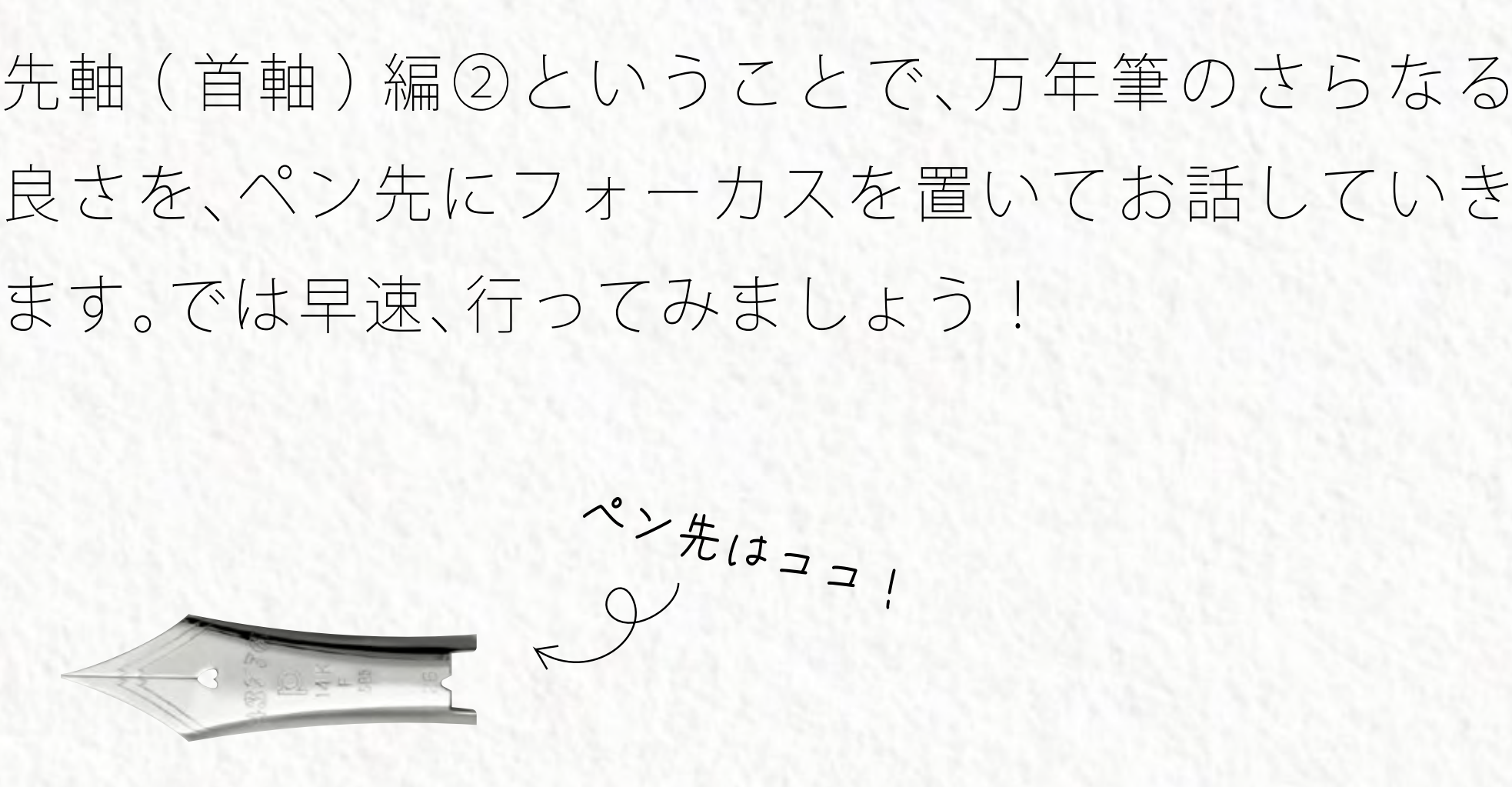
万年筆（まんねんひつ）の秘密基地（ひみつきち）

第4回 ペン先のはたらき（くみ） ～先軸(首軸)編②～

みなさん、こんにちは！『万年筆の秘密基地』です。前回は、万年筆の「ほぼ筆圧をかけずに書くことができるしくみ」を紹介しました。第4回となる今回は先軸（首軸）編②ということで、万年筆のさらなる良さを、ペン先にフォーカスを置いてお話していきます。では早速、行ってみましょう！

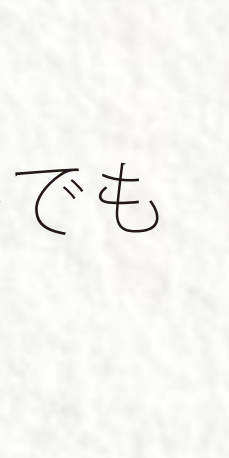


ペン先って何からできているの？

万年筆のペン先は、金属でできています。そのなかでも主に使われている金属はこちら！

金

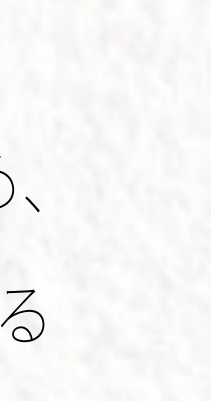
なんと、万年筆の多くは、ペン先に金が使われています！ 14金や18金のペン先の程よい軟らかさが、万年筆ならではの書き心地を生み出します。



万年筆が開発された当初、インクは酸性でした。そのため、インクの酸に侵されないことから、ペン先に金が使われるようになりました。現在では、特殊な金属が開発され、金以外のペン先を使った万年筆もたくさんあります。

ステンレス

比較的手ごろな万年筆に使われることが多いです。金と比べると硬いため、軟らかな書き心地が得られるよう、各メーカー工夫をこらしています。



プラチナ

当社は1967年に世界初となるプラチナ製のペン先を発売。その後2019年、創業100周年を記念してプラチナペン先の限定モデルを発売しました。

どうやって作られるの？

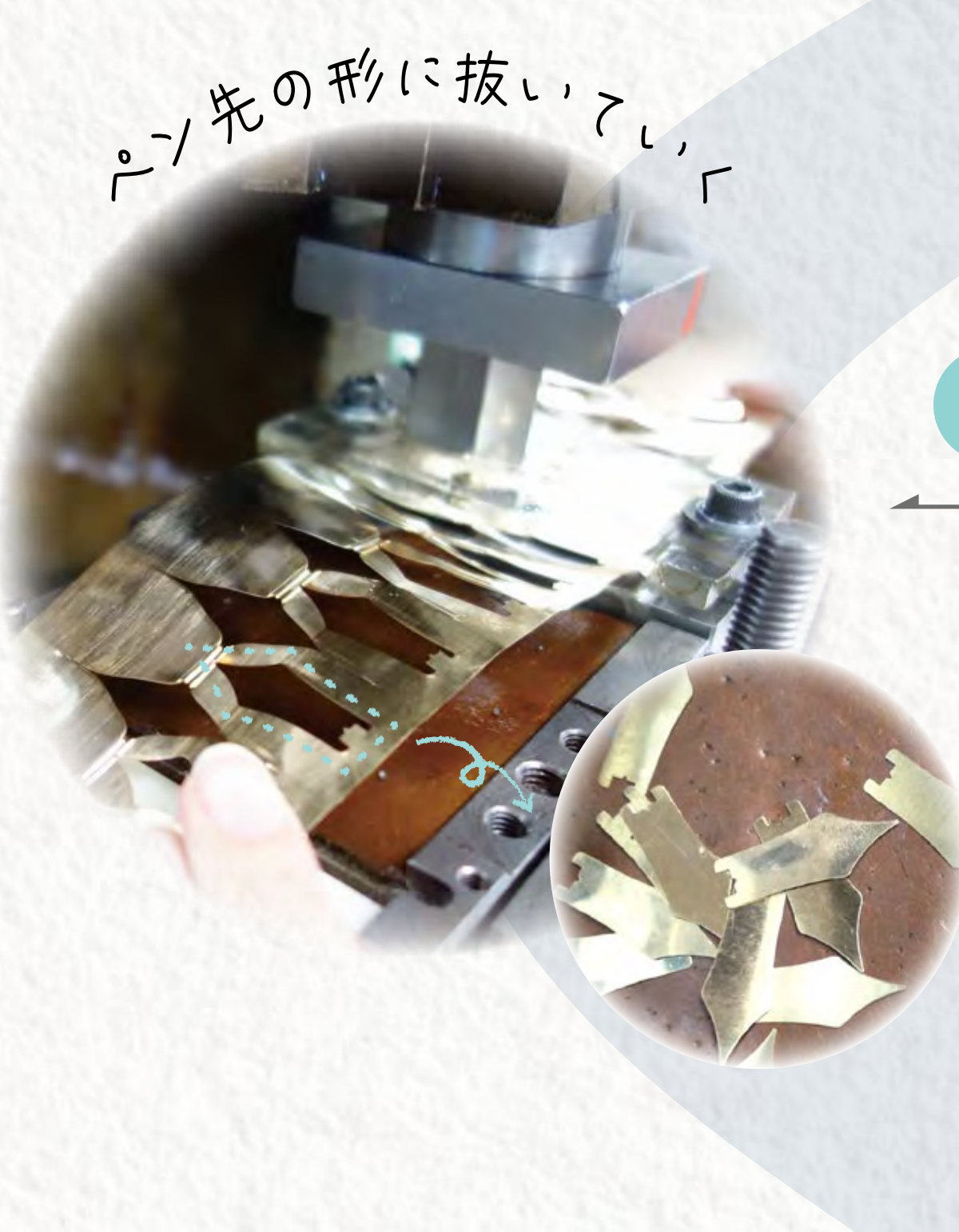
#3776センチュリーの14金ペン先は、なんと50以上の工程で作られています。一体どのような流れでできるのか、代表的な工程を紹介します。

素材

ペン先の製造は、素材作りから始まります。金や銅などを溶かし合わせ合金にして、「インゴット」と呼ばれる直方体の塊を成形します。

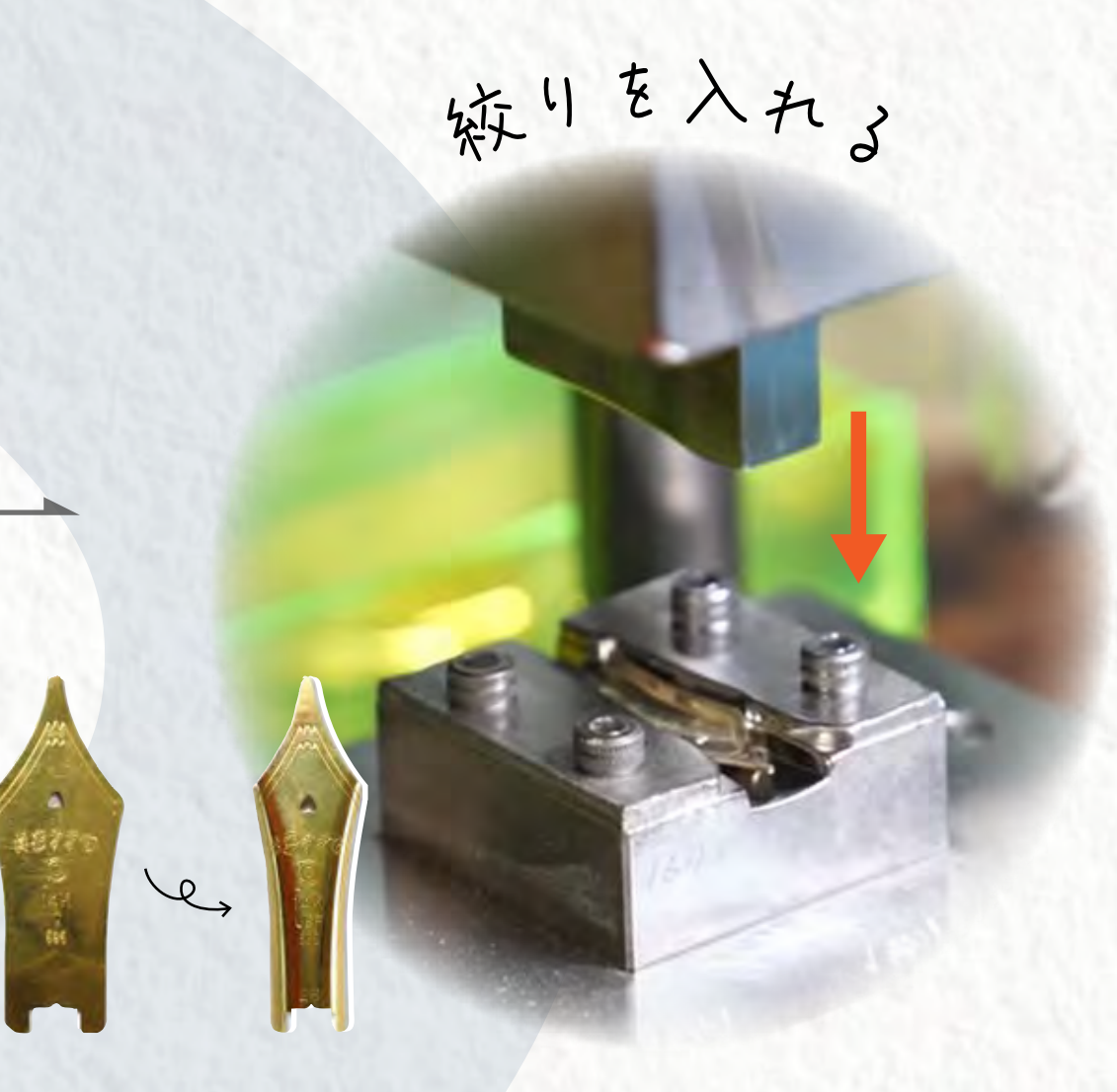
圧延

インゴットを何度も機械に通し、薄い帯状の板にします。実はペン先をよく見ると、先端に向かって金属の厚みが増しています！書き心地に関わる要素のひとつです！



型抜き

薄い帯状の板を、ペン先の形に抜きます。なんとなくペン先に近づいてきましたね。



絞り

ペン型に抜いたら、湾曲をつけるため金型でプレスします。これを絞りといいます。この力加減も、書き味に影響を与えます。

ペンポイントをつける

溶着

筆記時の摩耗に耐えられる、特殊な金属で作られたペンポイント。ペン型に打ち抜かれた合金の先端側を電気で溶かし、ペンポイントをつけます。

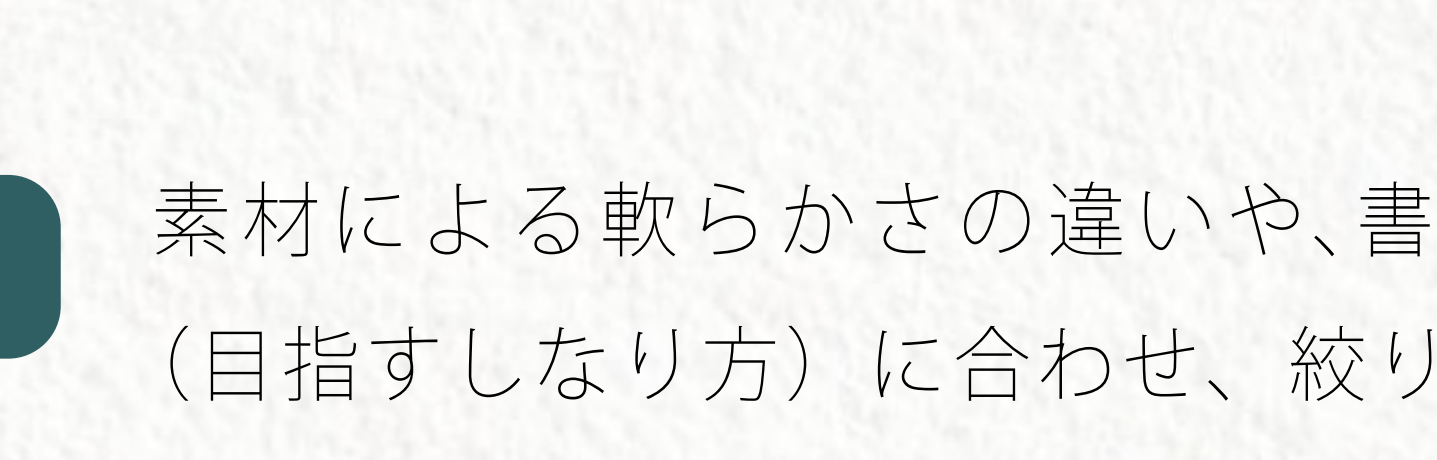
切り割り

高速回転した刃で、ペン先にインクの通り道となる切り割りを入れます。その後、研磨や調整などの工程を経て完成します。

ペン先のカタチ

このように、万年筆の命ともいわれるペン先は、書き心地へのこだわりのもと、多くの工程を経て完成します。そのこだわりから生まれたカタチには、どんな特徴があるのでしょうか？ 見ていきましょう。

厚み



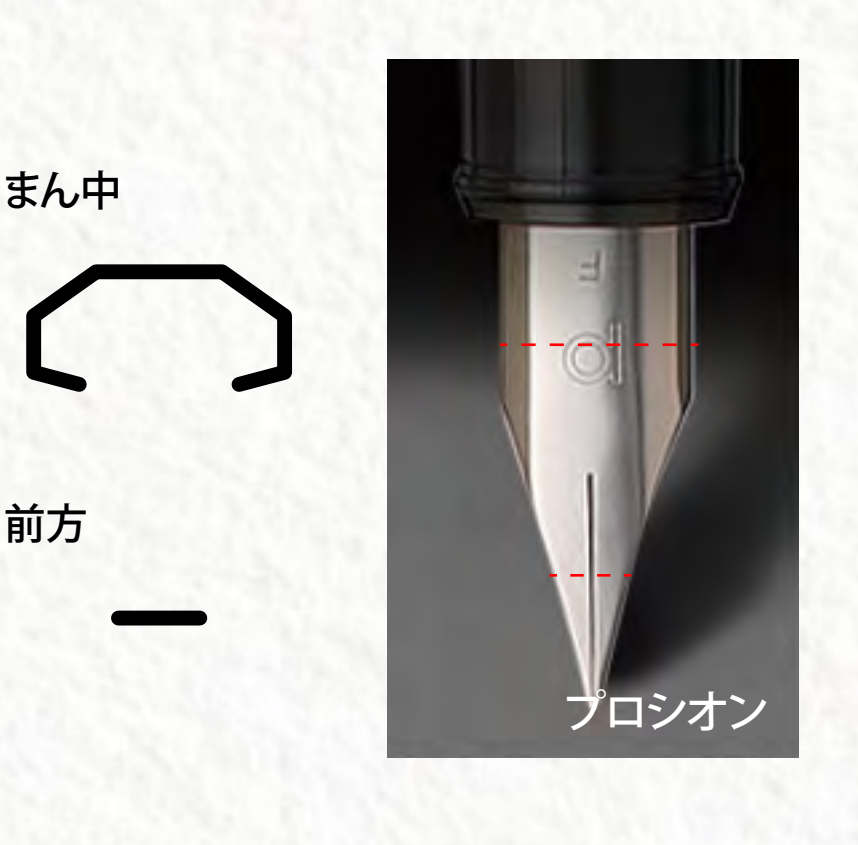
「圧延」の工程でふれましたが、ペン先の先端側に行くにつれ、厚くなっています。厚みを変えることで、絶妙な弾力(しなり)を生み出します。厚みに変化がない均一なペン先の場合、「素材」「抜きの形」「絞り」などで弾力(しなり)を生む工夫がされています。

絞り

素材による軟らかさの違いや、書き心地（目指すしなり方）に合わせ、絞り形状を工夫しています。

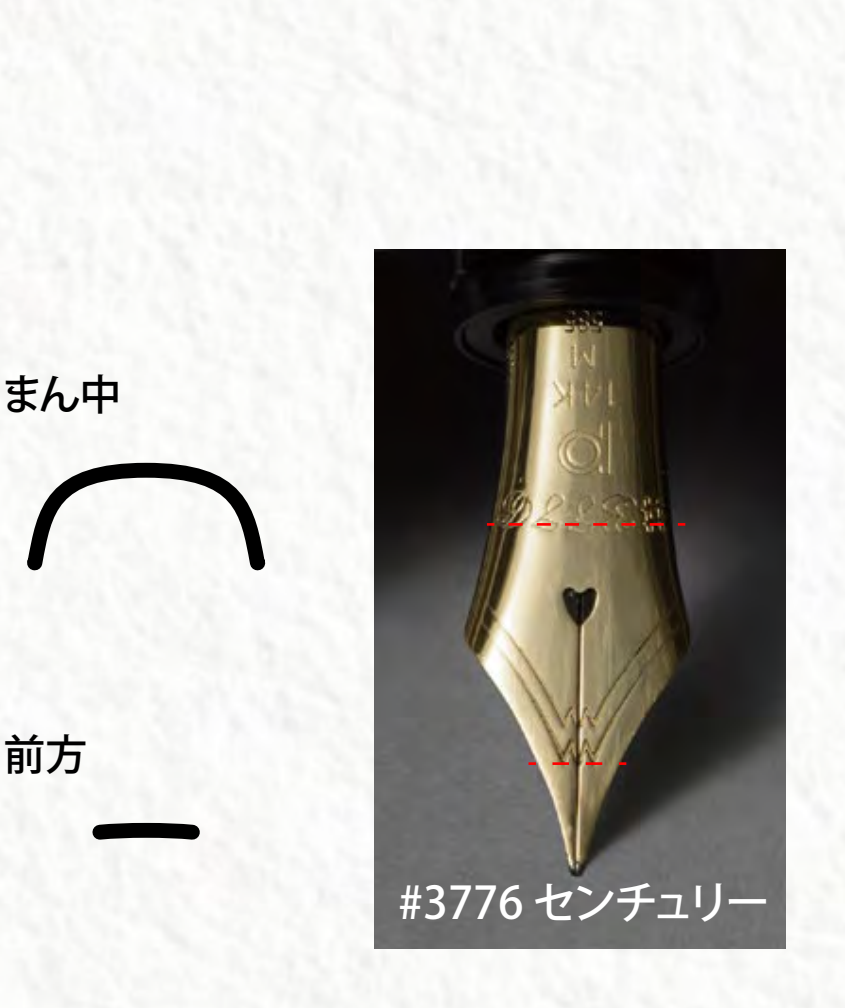
トンネルのようなカタチ

軟らかい金ペンで適度な硬さが欲しい場合、このようなカタチに絞ります。先端の方まで湾曲が続くためしなりにくく、カチっとした書き心地になります。



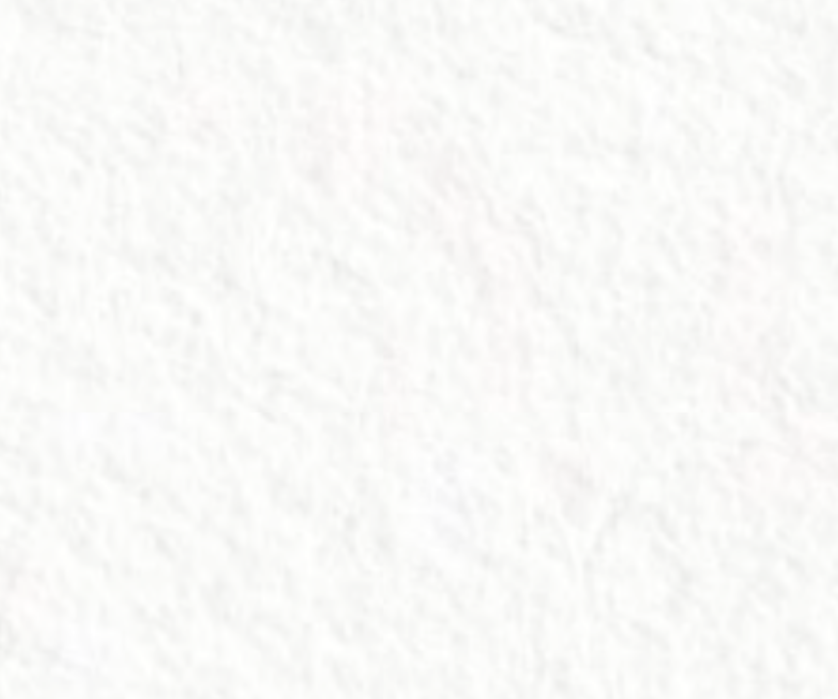
角ばったようなカタチ

角ばった形に絞って、ペン芯に抱きこむようにしてついたペン先です。ペン先全体でしならせるのではなく、先端側でしならせています。

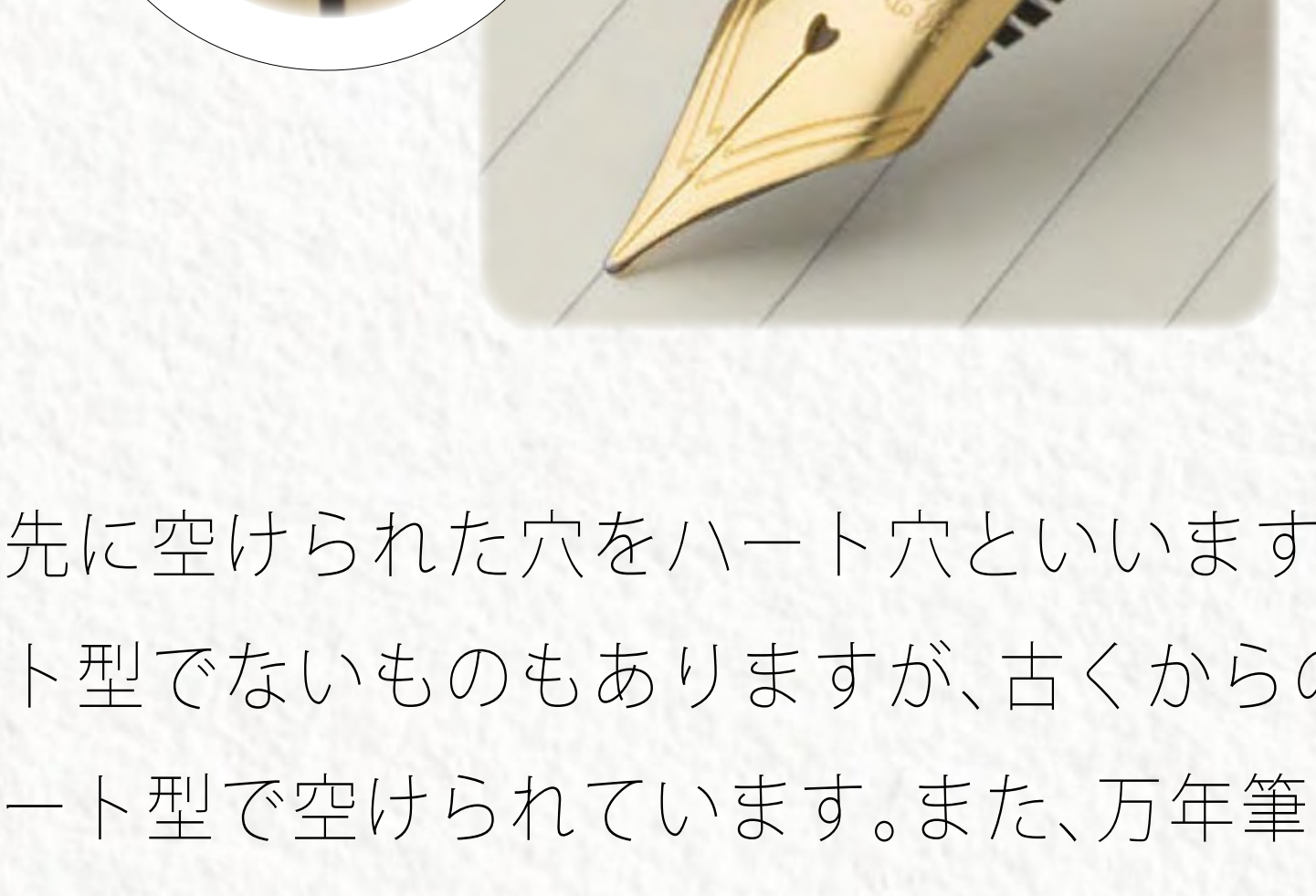


かまぼこのようなカタチ

一見トンネルのようなカタチですが、ペンの先端にいくにつれて上面が平らに近づいています。これによりペン先に独特の弾力が生まれ、「とめ」「はね」「はらい」など日本の文字特有の表現がしやすくなりました。



ハート穴



ペン先に空けられた穴をハート穴といいます。現在ではハート型でないものもありますが、古くからの伝統としてハート型で空けられています。また、万年筆は「気持ちを伝える道具」であることから、#3776 センチュリーをはじめとした当社商品にもハート型を採用しています。さらに、このハート穴の位置や大きさがペン先の弾力(しなり)にも影響するので、万年筆へのこだわりが見てわかるポイントでもあります。

ペン先は素材だけでなく、カタチにもこだわりを持ち作られています。ペン先は、万年筆の書き心地に大きく影響する部品の一つなのです。

今回は、万年筆のペン先がどのように作られているのか、万年筆の書き味はどういった要素からなるのかを中心に、ペン先について紹介しました。

次回は、キャップの役割や種類など、キャップについて深堀りしていきます。お楽しみに！

PLATINUM
JAPAN 1919